

海

鹿児島県立大島高等学校 二年 南 佳祐

静かな病室で、たくさんの親せきに囲まれて、祖父は安らかな眠りについた。そして、もう、二度と息をすることはなかった。悲しみにくれる母の横で、又郎はぼんやりと窓の外を眺めていた。台風の日だった。空はあつい雲におおわれ、今が昼であることを忘れるくらい、暗かった。叫び声をあげ、ふきあれる風が窓に雨をたたきつけ、窓ガラスに不思議なしま模様を描いていた。

祖父は海が好きだった。又郎が病院へ来るたびに、祖父は海の話をした。又郎は、祖父の話が大好きだった。

ある時、祖父は自分の幼いころの話をしてくれた。「わしがちょうどお前ぐらいのころ、よく村の近くの海へ遊びに行ったものだ。山をこえたところにあったんだが、それはそれは、きれいな海だったよ。見わたすかぎり、あたり一面にサンゴが広がり、まるでピンクの草原のようだった。机のようなサンゴに、えんとうのようなサンゴ、ふわふわしたもののや花びらのようなものもあって、そして、どこを向いても色鮮やかな魚たちが泳いでいるんだ。まるで、どこか知らない世

界へ来てしまったようでな、とてもうつくしかったな。ああ、もう一度、あの海で泳げたらどんなに幸せだろう。」

又郎は、その海をこの目で見たいと、強く思った。

祖父の死から、一年がたとうとしていた。又郎は、祖父の古里へ来ていた。山と海に囲まれた、小さな集落だった。民家はサンゴの石垣囲まれ、ところどころに、大きなガジュマルの木が石垣におおいかぶさるかのようにはえていた。見なれない景色ではあったが、又郎はなつかしい場所へ帰ってきた気がした。

村のはずれに、山へと続く道があった。又郎は、真ん中に草の生えた、その狭いじり道を奥へ奥へと進んでいった。

登るにつれ、木々はよりうつそうとして、より深い森へと変わっていった。思いのほか、山道はにぎやかだった。木々の間から日の光がきらきらと輝き、草や枝がこすれる音や、鳴きやまないセミの声でうるさいほどだった。どこからか美しい鳥のさえずりが聞こえたかと思うと、頭上からはばたく音がした。不思議な世界だった。

道は下りはじめたあたりから、けもの道へと変わり、風に乗ってうなり声が聞こえてきた。又郎は、胸がドキドキしていることに気がついた。いつしか木々はソ

テツのトンネルへと変わり、うなり声は空気中から聞こえるようだった。もうすぐ、そこまで近づいている。ソテツのトンネルをぬけ、アダンの林を進む。足元は、すでに白い砂へと変わっている。風が、汐のかおりを運んでくる。胸がわれそうだ。又郎は足をはやめた。そして・・・

突然、真っ白な光の中に飛び出し、又郎は目をふさいだ。ゆっくりと目を開く。

はだを焼くような、太陽でまぶしいほどに輝く砂浜。その先には、果てしなく広がる青い海。様々な青色に変化しながら、どこまでもどこまでも続き、水平線で真っ白な空とけ合う。又郎には、それがまるで、海が空からこぼれ落ちてきたように思えた。

とうとう着いたのだ。いても立ってもいられず、又郎は砂浜をかけ、青く輝く海へと飛びこんだ。冷たい水が、日に照らされた体に心地よい。海の中は静かだった。波でこすれる砂の音だけが、ただ静かに響いていた。しかし、又郎は海の歌が聞こえてくるように思えた。それは音ではなかったが、壮大な音楽のようで、時に何か、大きな姿となってせまってくるように感じられた。

いつしか、興奮はおさまっていた。又郎は落ち着いてあたりを見わたしたが、真っ白な砂浜が広がってい

るだけだった。水中へさしこんだ日の光が、その白い砂浜にきれいな波の模様を写していた。ふと、目の前の小さな岩の上に、赤いサンゴを見つけた。もっとよく見ようと、その岩へ近づいたとき、又郎は気づいてしまった。一面に広がる白い砂浜は、真っ白にくち果てた、サンゴのかげらだったのだ。そして、はつとした。今、自分が泳いでいるこの場所こそが、祖父が昔、見た海だったのだ。足元に散らばるかけらは、かつてあたり一面に広がっていた、サンゴの草原だったのだ。いつか、祖父が話したことがあった。今から十数年前、世界の海で、たくさんのサンゴが死んでしまったことがあった。この海も、その時死んでしまったのだろう。

又郎は、目の前にある、赤いサンゴを見つめた。このサンゴが当時の生き残りなのか、新しく芽生えた命なのか、又郎にはわからなかった。

突然、近くを大きなかけが通りすぎた。それは、二メートルもあるような大魚だった。まるでメガネをかけたような顔をしたその魚は、死んだサンゴの上をゆつくりと泳いでいた。その姿は、とてもさびしそうだ。又郎は、その魚に目をうばわれてしまった。その魚の体の模様が、まるであの日、病室の窓から見た風景にそっくりだったのだ。大魚はゆつくりとゆつくりと泳いでいき、そして、とうとう青い世界の中へ消

えていった。

その悲しげな後ろ姿が見えなくなったとき、又郎ははげしい痛みを感じた。胸を刺すその痛みは、海全体から感じられた。しかし、又郎は気づいていた。海が泣いているのだと。これ以上ここにいてはいけない気がして、又郎は海からあがった。そして、ようやく自分が泣いていることに気づいた。来るときには気づかなかったが、砂浜のすみにたくさんのゴミがたまっていることに気がついた。どこからか流れてきたのか、真っ白な砂浜には似合わなかった。

又郎は、もう一度海を眺めた。どこまでも続く姿は変わらなかったが、ここへ来たときの輝きはもうどこにもなかった。又郎は、あの大魚を思い出していた。そして、波が消えていった海のかなたを眺め、ある言葉を思い出した。

ネリヤカナヤ。

昔からの言い伝えで、海の間こうには神の国があるという。全ての命が生まれ、帰る場所である。

森の中から、美しい鳴き声が聞こえてきた。キヨロ
ロロロロ・・・

この海は、空へとつながっているのだろうか、海の間こうの神の国へとつながっているのだろうか、祖父はどこへ行ったのだろうか。

遠ざかっていく大魚の姿が、又郎の中に何度も何度もよみがえってきた。

